

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13132

研究課題名（和文）20世紀前半のイタリア芸術文化におけるアメリカへの眼差し

研究課題名（英文）Gazes on America in Italian Culture of the First Half of the 20th Century

研究代表者

小久保 真理江（Kokubo, Marie）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：00815277

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀前半のイタリアの作家や芸術家がアメリカ合衆国の社会・文化・人々についてどのように語り、アメリカをどのように表象したのかを調査・分析した。その上で、それらの言説・表象と時代背景との関係性や、モダニティに対する反応との関係性を明らかにした。さらに、20世紀前半のイタリアで幼少期・思春期を過ごし20世紀半ばから活躍しはじめた作家とアメリカ文化との関わりについても調査・分析した。その上で、幼少期・青年期におけるアメリカ文化の受容がその後の活動に与えている影響を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀前半のイタリアにおけるアメリカをめぐる言説・表象に関しては、1930年代から1940年代前半にかけての左翼知識人のアメリカ文学への傾倒がよく知られており、それについては多くの先行研究が存在するが、文学以外の領域やその前後の時代については十分に注目されてこなかった。領域や時代の枠を超え、より広い視座からアメリカをめぐる言説と表象の複雑な様相と変遷に光を当てたことに本研究の学術的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on an investigation and analyses of discourses on and representations of American society, culture, and people, as produced by Italian artists and writers in the first half of the 20th century, shedding light on the various relationships of the discourses and representations to the respective historical backgrounds of those persons and to their respective reactions to modernity. It also explores the relationships between American culture and a number of writers who spent their childhood and adolescence in Italy in the first half of the 20th century and played important roles in Italian culture from the mid-20th century on. Analyses of their works reveal how the American culture that they absorbed in childhood and adolescence influenced their later activities.

研究分野：近現代イタリア文化

キーワード：イタリア アメリカ 文化 文学 20世紀

1. 研究開始当初の背景

20世紀はアメリカ合衆国が政治的にも文化的にも強い力を持ち世界に大きな影響を与えた世紀である。イタリアも20世紀にはアメリカから大きな影響を受けており、この時代のイタリア文化の展開を深く理解するためには、アメリカ文化との関係について考察する必要がある。イタリアにおいてアメリカの影響力が特に高まり生活の「アメリカ化」が急速に進んだのは第二次世界大戦後だが、すでに20世紀前半からアメリカの大衆文化はイタリアに流入し、人々の関心を集めはじめていた。したがって、イタリアとアメリカの文化的関係を理解するためには、特に20世紀前半のイタリア人がアメリカに対して注いだ眼差しの複雑な様相と変遷を捉えることが重要である。

筆者は博士後期課程でイタリア20世紀前半の代表的な作家であるチェーザレ・パヴェーゼとアメリカ文化との関係について研究し、博士号取得後はファシズム政権下のイタリアにおけるアメリカ文化の受容や影響について研究を行った。その過程で、20世紀のイタリアにおけるアメリカをめぐる言説や表象の変遷に強い関心を抱くようになり、より広い視座からアメリカ文化との関係についての理解を深めるため、本研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20世紀前半のイタリアにおけるアメリカのイメージの複雑な様相と変遷に光を当てることである。特に、イタリアの作家や芸術家がアメリカについてどのように語り、アメリカをどのように表象したのか、そしてそれらの言説・表象がそれぞれの時代の政治的・文化的背景とどのように関係しているのかを明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

イタリアの作家や芸術家の評論文・紀行文・滞在記・書簡・インタビュー記録などの資料を集め、アメリカの社会・文化・人々についての言説を分析した。また、アメリカに関係するイタリアの文学作品、映画、絵画、イラストなどの作品を探し、アメリカの社会・文化・人々についての表象を分析した。主に1900年から1950年に発表された資料や作品を中心に分析したが、1950年以降のものも必要に応じて分析対象に含めた。特に20世紀前半に過ごした幼年期・青年期の回想の要素が強い作品は20世紀後半のものであっても重要な資料として分析した。研究テーマに関連する先行研究を集め、先行研究の流れや傾向を整理するとともに最新の研究動向の把握にも努めた。先行研究から得られた知識を土台としながら、自らの分析を進めていった。

4. 研究成果

20世紀前半のイタリアの芸術家や作家によるアメリカをめぐる言説や表象は各時代の政治的・文化的状況と密接に関わっており、同一人物においても政治的・文化的状況とともに変化していることが明らかになった。また、1920年代から1930年代にかけての時代においては、アメリカをめぐる言説や表象にモダニティに対する反応があらわれていることが多いことも分かった。同時代における言説・表象であっても、個々の政治的立場やモダニティに対する反応の差異により、アメリカへの眼差しは異なっており、一括りに語ることは難しい。

先行研究はアメリカについての言説・表象のみに焦点を当てているものが多く、他の国や地域に関する言説・表象と比較しているものは少ない。本研究では、アフリカ大陸の国々に対する同時代のイタリア人の眼差しに関する調査・分析も行い、アメリカに対する眼差しと比較した。20世紀前半は、イタリアにおいてアメリカへの関心が高まった時代であるとともに、植民地政策や戦争を背景にアフリカ諸国への関心が高まった時代でもある。アフリカ大陸の国々に対する当時のイタリア人の眼差しは、アメリカに対する眼差しと対照的な面もあるが、「新天地」のイメージにおいては共通性も見られる。また、ウェスタン映画や冒険小説などのアメリカ文化作品のイタリアにおける人気と普及は、アフリカの植民地へのイタリア人の眼差しとも関連性を持つ。さらに、イタリアにおけるアフリカ系アメリカ人に関する言説・表象にも、アフリカの植民地への眼差しとの関連性や類似性が見出せる。

本研究においては、20世紀後半に活躍した作家や芸術家らが幼年期・青年期にアメリカ文化にどのような眼差しを注ぎ、アメリカ文化をどのように受容していたのかについても分析・考察し、彼らの20世紀後半における作品や活動も、幼少期・青年期のアメリカ文化体験から大きな影響を受けていることを明らかにした。

2019年12月には、東京外国語大学総合文化研究所にローマ・ラ・サピエンツァ大学のラウラ・ディ・ニコラ准教授を招き、イタリア語による講演会「L'America raccontata dagli scrittori italiani (イタリアの作家たちが語ったアメリカ)」を開催した。この講演会では、ディ・ニコラ氏に口

頭発表を行っていただいたほか、自らの研究成果を口頭で発表した。具体的には、チェーザレ・パヴェーゼ、イタロ・カルヴィーノ、ウンベルト・エーコという3人の作家それぞれのアメリカをめぐる言説や表象の分析を発表した。三人のアメリカに関する言説・表象には、属する世代の違いや作家・知識人としてのそれぞれの特質が反映されていることを明らかにした。また、同じ一人の作家のなかにおいても、アメリカへの眼差しには、時代による変化があり、その変化が歴史的・政治的背景と結びついていることも明らかにした。

さらに、2020年2月には、上記の口頭発表を基盤に執筆した論文「アメリカへのまなざし—パヴェーゼ、カルヴィーノ、エーコ」を機関紙『総合文化研究』(第23号)に発表した。日本ではイタリアの作家とアメリカ文化との関係については一般的にわずかにしか知られておらず、研究もほとんどなされていない。その意味で、上記の講演会や口頭発表・論文は、日本におけるイタリア研究や比較文学・文化研究に新たな視座をもたらす意義があったと言える。

2021年には、幅広い領域で活躍したイタリア未来派の芸術家であるフォルトゥナート・デペーロのアメリカ滞在経験に関する調査や、デペーロのアメリカをめぐる言説や表象の分析に特に力を入れて研究を行った。デペーロは1928年から1930年までと1947年から1949年まで、二度に渡ってアメリカに滞在しており、自らのアメリカ体験を絵画やイラスト、デザインの作品に反映させるのみならず、言葉で表現することも行った。特に1928年から1930年までニューヨークに二年間滞在した際の経験については多くの文章を書いている。本研究では、このニューヨーク滞在記の文章に身体に関する記述が多く登場することに注目し、近代的大都市における人間の身体がこのテクストのなかでどのように表象されているかを詳細に分析した。2021年9月にはその成果を「早稲田大学イタリア言語・文化研究会第170回例会」(オンライン開催)にて口頭発表の形で発信した。その後、この口頭発表を土台にさらなる調査・分析を進めながら論文を執筆し、機関紙『総合文化研究』(第25号)に発表した。デペーロの文章表現は視覚芸術作品と比べると、これまでさほど注目されておらず、研究も少ない。その意味で、デペーロの文章表現の詳細な分析を行った本研究の成果は、イタリアにおけるアメリカのイメージやアメリカ文化の影響について考える上で有意義であるとともに、未来派研究の分野にも新たな知見をもたらすものであると言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小久保 真理江	4. 巻 23
2. 論文標題 アメリカへのまなざし：パヴェーゼ、カルヴィーノ、エーコ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 総合文化研究	6. 最初と最後の頁 52-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/94355	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小久保 真理江	4. 巻 25
2. 論文標題 フォルトゥナート・デペーロのニューヨーク滞在記における身体の表象	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 総合文化研究	6. 最初と最後の頁 96-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/117040	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小久保真理江
2. 発表標題 L' America di Pavese, Calvino ed Eco
3. 学会等名 講演会 「L' America raccontata dagli scrittori italiani」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小久保真理江
2. 発表標題 「海の向こう」へのイタリア人のまなざし
3. 学会等名 2020年度第2回地中海文学科研・研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小久保真理江
2. 発表標題 フォルトゥナート・デペーロのアメリカ滞在
3. 学会等名 イタリア言語・文化研究会第170回例会（オンライン）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関